

始まりの条件 : H・アレント『活動的生』第二七節をめぐって

著者	出雲 春明
雑誌名	倫理学
号	24
ページ	83-94
発行年	2008-03-20
その他のタイトル	Die Bedingung des 《Anfangs》 : Eine Auslegung zu Hannah Arendts Vita activa § 27
URL	http://hdl.handle.net/2241/99971

始まりの条件

——H・アレント『活動的生』第二七節をめぐって——

出雲 春明

序

ハンナ・アレントにとって、全体主義体制の出現は西洋的伝統の一つの帰結を告げるものに他ならなかった。その出現は必然ではないにしても、まぎれもなく過去からの連続性の上に立っている。従って、人々はもはや盲目的に伝統に従うことはできず、故郷喪失状態に陥っている。斯かる危機的状況を自覚する者は、自分が「もはや——ない (no-longer)」過去と「未だ——ない (not-yet)」未来の間に穿たれた現在という時間の「裂け目 (gap)」に投げ出されていることを了解するであろう (BPE: 9)。そして、「この裂け目は……絶えざる戦い……過去と未来に抗することによって存在する」(BPE: II) が、この戦いは過去からの連続性に自らを埋没させることなく、予測不可能な未来の圧迫に抗して、新たに我々の基盤たりえる故郷を創設し、後代に継承していくことである。アレントはこれをアウグスティヌスの言葉を用いて「一つの始まりの始まり」(ibid.) のための戦いと呼ぶ。この「始まり (Anfang)」の問題は、アレントの筆名

を高めた著作『全体主義の起源』(英語版一九五一年、独語改訂版一九五五年) においてすでに表明されており (EUTH: 90ff.)、彼女の思想全体の通奏低音として鳴り響いている。そして、政治思想分野に大きな影響を与えた『活動的生』(一九六七年)——『人間の条件』(一九五八年) の独語改訂版——における活動的生の現象学も「始まり」の条件の探求によって基礎づけられているのである。そこでアレントは自らの活動概念を構成するに際して、いくつかの民族の政治的経験を契機としているが、本稿はそのなかでも『活動的生』第二七節「活動のアポリアからのギリシア的退路」を手掛かりにギリシア人の政治的経験を扱い、「始まり」の条件という観点からギリシア的活動の到達点並びにその限界点が示すことを課題とする。

一 過去と未来の間で

始まりの条件という主題に取り組む前に、我々はまず「活動のアポリア」とは何かを説明する必要があるが、それは先述し

た時間の裂け目という意識に関わっている。まず指摘されるべきなのは、アレントにおいて活動とは、予め措置された前政治的主体の政治への参与を意味しているのではないということである。むしろ、主体はその都度の活動において、しかも自らの意図を離れて「暴露」される。つまり、主体は何ら実体的なものでも、没交渉的に成立するものでもなく、その都度行為遂行的に、瞬間的に現出するものである。このことは「活動的生 (Vita activa)」が人間実存にとって構成的であることを告げている⁽¹⁾。そして、アレントは諸活動力の中でも対人関係において発揮される「活動 (Handeln, praxis)」と「言論 (Sprechen, lexis)」を、個の特異性を顕現させると共に「始まり」を切り開く活動力として捉えている。活動によって人々の間の関係性は「複数性 (Pluralität)」——単なる集合と区別された、個人の特異性と他者との相互共同性の相即関係——として自覚されるのであるが、これは人間事象という相対性を免れない領域で営まれるがゆえに、人々を始まりへの可能性へ誘うと同時に常に自らの有限性へと引き戻す。これが「活動のアポリア」と呼ばれるものであり、「複数性」という他者との動的関係において避けて通れない怪楯である。

このアポリアはアレントによって次の三つに定式化される。まず、「活動結果の予測不可能性 (unpredictability)」次に「活動過程の不可逆性 (irreversibility)」最後に「活動過程をつくるものの匿名性 (anonymity)」である (HC: 220)⁽²⁾。活動は他者との関係において営まれるがゆえに、一つの活動はそれに對

する応答を際限なく誘発し、この連鎖反応は活動者の予測しない結果を次々と惹き起こしていく。よって、活動者は自らの活動の結果を前もってはもちろん、その過程においてすら予測することはできず、意図しない不都合な結果が生じたとしても、それは取り返しがつかない。また、以上の理由から、仮に歴史を貫く法則があったとしてもそれは我々に知覚されずに隠されたままであり、神のごとき超越的な歴史の制作者を問おうとしても現世的存在者である我々は超越者との間に穿たれた断絶に直面するのみである⁽³⁾。

斯かる活動のアポリアは、「過去と未来に抗する」絶えざる戦いによって生起する現在という時間の「裂け目」を指示している。活動者達は未来の予測不可能性と過去の不可逆性に抗しつつ「始まり」の創設へと臨まねばならない。しかし、この二つの不可能性に挟撃されている我々はいかにしてその重圧に萎縮せず活動することができるのだろうか。現在の絶えざる戦いにおいて、この挟撃は宿命づけられていると言える。なぜなら、活動結果が予測不可能だからこそ、我々は取り返しをつかない (不可逆的な) 出来事を後悔するのであるし、逆に一度起こってしまった出来事が取り返しをつかないものだからこそ、我々は結果の予測不可能性に苦悩するからである。従って、我々が始まりに臨むとき、斯かる過去と未来の相即性は切迫したものとなる。そこでは過去からの継続性を忘却することも、起こらんとする出来事を漠然とした予期へと回収することもできない。人々がなすべきなのは、「赦しの力 (die Macht zu verzeihen)」によつ

て互いに赦しあうことで過去の出来事を引き受けつつ、それへの従属関係から離脱し、同時に「約束の力 (die Macht des Versprechens)」によって相互に拘束し合うことで共同性の基盤を確保し、未来の不確実性に挑戦することである³⁾。このように、その都度自らの基盤を構築しつつ同時にそれを更新していく構えこそが始まりの条件である。

上述のように、活動することによって過去と未来の間に穿たれた現在の裂け目は自覚され、この裂け目において人間の有限性と自らの基盤の相対性は露わにされる。対人関係において営まれる活動は利他的でそれのみでは具体的で堅固な所産を何も残さず常に空虚さが伴う。それゆえそこには「人間事象の壊れやすさ」(『活動的生』第二六節の表題)という問題が伏在しているが、この壊れやすさは同時に可変性であるとも言え、この可変性ゆえに活動者には始まりへの可能性が開かれている。そして、活動の利他的性のゆえに人々は、その都度の瞬間に自らの生の意味を賭け、始まりを企投するのである。従って、そこには人間の生の「一回性」が刻印されていると言える。そして、斯かる一回性が自覚されるのは人間が過去との連続性に従属することも、これから起こることから目を逸らすこともなく、故郷の創設という「新しい始まり (Neuanfang)」(VA: 216f)を見据える場合である。そして、アレントは活動のアポリアへの対抗策として「赦し」と「約束」という相互行為を提示し、それを始まりの条件としたのであった。では、ギリシア人はこのアポリアをどの程度自覚し、それに対応したか。この問題に答え

るために我々はまずギリシア人の活動理解を確認する必要がある。

二 ギリシアの活動の原点

『活動的生』第四節「人間、社会的あるいはポリスの動物」において、古代ギリシア人の政治的経験は「都市国家の創設がはじめてギリシア人に政治的領域において、つまり活動と言論によって自らの生を過ごすことを可能にした」(VA: 35)という確信として提示されている。しかし、「政治的であること、ポリスで生きること、すべての事象が相手を納得させる言葉を用いて解決され、強制あるいは暴力によらないということであった」(VA: 36f)という指摘とは裏腹に、アレントがギリシア人の活動の起源として提示するのはアキレウスの偉業、すなわち戦場での武威である。アレントの診断によれば、このアキレウスの活動こそがポリスの活動も含むギリシア人の活動の基盤となっているのである。そして、後述するように、ここにギリシア人の活動の限界もある。本節ではまず、この第四節の議論を手掛かりにして、政治的経験を構成するものとされた活動と言論に対するギリシア人の了解を確認しておく。

アレントによれば、活動と言論という「この二つの人間の能力が共属していること、人間の最高度の天分を表しているという確信は、ポリスの創設より古いように思われ、すでにホメロスにおいて自明なものと見なされている」(VA: 35)。そして、

アレントは『イリアス』を引用しつつ、次のように指摘する。

「私はあなた[「アキレウス」]が偉大なる行為の遂行者、偉大なる言葉 (megalo logos) の話し手であるように教育するように頼まれた」⁽⁵⁾。これは明らかに、アゴラのための教育並びに戦争のための教育に関わっており、それらに共通なのは双方がまさに言葉と行いにおいて自らを際立たせる機会を与えているという点である」(HC:25, VA: 322, Ann. 7 zur ss. 35.6—傍点、「」内引用者)。

ここではまず、ギリシア人によって政治に要請されたのは「始まり」の創設ではなく、「自らを際立たせる機会を与える」ことであった点を確認しておきたい。そして、アレントはここで『アンティゴネー』の最後の詩句「だが偉大なる言葉は、尊大なもの的大いなる打撃に対抗(あるいは、返報)しつつ、老齢において思慮することを教える」(HC:25, note 8—「」内原文)⁽⁶⁾より、偉大な言葉とは「手痛い打撃に応答する」ことであると指摘する。ここで「言葉 (logos)」は戦争における物理的応酬に比肩するものとして了解されており、ギリシア人の政治は他者に対して自らの卓越性を示すための競い合いによって規定されていたことが告げられている。

「言論と活動は等根源的で互いに同等のものと見なされていたのであり、それらは同種同等であった。そして、こ

のことはすべての政治的活動は暴力手段に訴えない限り、言論によって行われるからだけではない。それはもつと根本的に言えば、正しい瞬間に正しい言葉を見つけることが、他者に与える言葉の情報や伝達内容とはまったく別に、すでに活動であるからである。沈黙であるのは暴力だけであり、この理由からすでに純然なる暴力は決して偉大なるものへの応答たりえない」(VA:29—傍点引用者)。

「偉大なる言葉」は「アゴラのための教育」に、「偉大なる行為」は「戦争のための教育」に関わっている。そして、言論と活動の等根源性と同等性は、言葉での応酬が戦場での武勇の競い合いと同じものであるというギリシア人の了解を示している。そして、言葉での競い合いは「正しい瞬間に正しい言葉を見つける」ことに存する。英雄の偉業には試練や好敵手の存在が不可欠なように、言論には応答すべき相手が要請される。この意味で「自らを際立たせる」のは相互に応答し合うことによってはじめて可能となるのであり、それゆえ相手の人格を黙殺する一方的な力の行使は単なる暴力にすぎなく、「偉大なるものへの応答たりえない」のである。アリストテレスの「ポリス動物 (zoon politikon)」という人間の定義が「ロゴスをもつ動物 (zoon logon ekhon)」と「第二の定義によつてはじめて了解可能になると指摘される (VA:37) のは斯かる「相互応答関係」ゆえにある。

以上で確認したように、ギリシア人の活動の原点は自らの偉

大きさを顕示するための他者との競い合いにある。しかも、それは単なるスタンドプレーではなく、他者との対等な相互応答関係によって基礎づけられている。しかし、ポリスの創設以後、「活動と言論はますます分離し、それらは二つの互いにまったく別々の行為を形成するまでになった」(VA:36)のであり、その際、この相互応答関係は後退していくことになる。

「重点は活動から言論へと移り、他方で言論は人々が自分たちに起こっていることあるいは彼らのまなざしの前で生じていることに応じ、あるいはそれと拮抗し、あるいはそれに対して逆らうことができる際立った様式としてはもはや見なされず、語り (Rede) は今や本質的に相手を説得し納得させる手段として見なされた」(ibid.)。

こうして「言論 (Sprechen, Lexis)」の相互応答関係は忘却され、相手を説得するための「公的語りの技巧 (die Kunst der öffentlichen Rede)」としての「弁論術 (Rhetorik)」へと関心が移っている (VA:422, Anm. 8 zur s.36—ライン引用者) が、「後代に戦争と語りの技巧が本来的政治教育の前面に移動してさえ、この組み立てそれ自体はなおこの最も初期の、いわば前ポリスの経験によってつねに規定されていた」(VA:36)。

では、このポリスの活動を規定していた前ポリスの経験とは何であるか。それこそ「闘技精神 (agonale Geist)」(VA:243) と呼ばれる競い合いの精神であり、斯かる他者に優越しようと

する気分が根本的にギリシア人の活動を規定し続けていたのである。そしてアキレウスの活動から継承されたこの闘技精神にこそギリシア人の活動の限界点がある。

ここにおいて我々はようやく第二七節「活動のアポリアからのギリシア的退路」に踏み込む用意ができた。次節では活動のアポリアの解決策としてのポリス創設が組上に載せられることになる。議論を先取りすれば、ポリスの創設は「正しい瞬間に正しい言葉を見つけること」という活動Ⅱ言論の規定に深く関わっている。アレントは先述の『アンティゴネー』の詩句の根源的意味を最もよく汲み取ったものとしてヘルダーリン訳の参照を促しているが、そこでは「偉大なる言葉 (megalo-logoi)」に対して「大いなるきらめき (Grosse Blicke)」という言葉が充てられている (HC:256, note. 8, VA:36)。いかなる偉業も人々によって記憶され、後代の人々に伝承されなければ、まさに一瞬の「きらめき」のうちに消失してしまふであらう。このきらめきを、言い換えれば常に「壊れやすさ」を孕む活動を不朽のものとして保持することがポリスに課された機能であった。そして、ここで我々にとって問題となるのは、このきらめきが「始まり」を志向するものであったかどうか、数多の偉業を蓄積するポリスが「新しい始まり」の創設という要請に耐えるものであったかどうかである。前者に対してはすでに答えは出ている。ギリシア人にとって活動と言論の意味は何よりもまず「自らを際立たせる」ことにあったのである。

三 ギリシア的活動の限界点

第二七節において、アレントはアキレウスの活動の特性を次のように指摘している。

「誰かが自覺的に〈本質的 (wesentlich) である〉⁽⁹⁾ というよりはむしろ〈不死の名声〉という栄光 (Aura) において永続し、時間の衰退を通じてそれを貫通して持続可能な物語と同一可能な人格 (identifizierbare Person) を後に遺すことを狙うなら、彼は実際のところアキレウスのように短い人生と天逆を選ばねばならない。最高の集中・軍隊の出撃 (Einsatz) を生き延びない誰か (wer) のみが、その集中において設立された同一性と潜在的な偉大さの疑いの余地のない主であり続けるのである。なぜなら、彼は死によって始めたことの結果と継続から逃れるからである。」(YA: 242—傍点引用者)。

アキレウスの活動は「自らを際立たせること」に眼目があり、しかも「他の一切の要因を代償に、活動において生じる自己暴露という現象が強調されている」がゆえに、「著しく個人主義的 (individualistisch) である」(YA: 243—傍点引用者)。⁽¹⁰⁾ なぜなら、「彼は死によって始めたことの結果と継続から逃れる」から、偉大な行いに自らの生のすべてを賭け、その行為の帰結、すなわちその影響を被る人々を考慮しないからである。

「持続的情態性としての運」「人格の同一性をなす持続的情態性」(YA: 242)⁽¹¹⁾ は常に、自分自身についての何かを共同的に暴露する継続性 (Kontinuum) において生きること、を断念することによってのみ保証されるが、誰も完全に自分自身を明らかにすることはできないのであり、その代わりに、絶対的な特異性における最高の集中において生涯の全体を集中の結果と生の終焉が重なるような仕方で集約することを決意する」(YA: 243—「」内、傍点引用者)。

先に指摘したように、ある人物の人格はその都度の活動によって、行為遂行的に生起する。偉大な行いの瞬間に現れる偉大な人格を「同一し (identifizieren)」その「幸福 (eudaimonia)」を持続させるためには、人生最高の活動をなした後に速やかに人々の間から退却せねばならない。このようにアキレウスの活動は他者との相互応答と同時に、それを構成する「共同的に暴露する継続性」からの離脱も条件としている。そして、「この自己暴露は通常、活動の本来的な目的ではないから、活動されたことの結果の予測不可能性は、この観点では大きな問題として認められることはない」(ibid.—傍点引用者)のである。アレントの活動の第一目的は「始まり」の創設にあった。だが、アキレウスの活動は自己の卓越性の顯示こそが第一目的であるがゆえに、「個人主義的」であらざるをえないのである。従って、それは「複数性」の条件に著しく抵触していると言わざるをえず、

それゆえに複数性に由来する「予測不可能性」が自覚されることもないのである。そして、それはまた故郷創設に向けられる「約束」という契機の下如も指し示している。しかし、この自己暴露こそがギリシアの活動を規定し続けていたのであり、それに伴う問題点も当然ポリスの活動に引き継がれることになる。

「疑問の余地がないのは、古代ギリシアを念頭に置いた活動の原型は、自己暴露の現象によって規定されていたということであり、その現象からいわれる闘技精神 (*agonale Geist*) が説明される。この情熱的な自己と他者を比較することが都市国家における政治なものの概念にその本来的内容を与えた」 (*ibid.*)。

アキレウスの偉業はトロイア戦争という非常事態において可能になったものであり、文字通りの意味で英雄主義的である。そして、その「きらめき」は詩人ホメロスによって不滅の物語とされて後世の人々の記憶に遺り、ひいてはポリス的活動を主導する原理ともなった。しかし、戦争という極限状況を条件とする限り、「自らを際立たせる機会」は著しく限定されざるをえないし、誰にもホメロスがいるわけでもない。ポリス創設の意味はこの問題の解決にある。

そこで、ポリスに要請される第一の課題は、「それまでは通常ではない稀な環境のもとでのみ現実化されることが可能であ

り、それには男達が遠国で非日常的なことを成し遂げるために、家と農園と故郷を去らねばならなかったところの行いを可能にする」 (VA: 247) ことである。さらに言えば、ポリスは「ひとが『不死の名声』を獲得できる機会を規則的に提供し」、「そのもとで各々一人一人が自らを際立たせ、言葉あるいは行いで、彼が自らの特異な差異性 (*einmaligen Verschiedenheit*) において誰であつたかを開陳することができると好機を組織化する」 (*ibid.*) という機能を担っていた。つまり、ポリスの創設は通常の市民生活において、リスクを軽減する形でより広く自己開示の好機を提供することを目的としている。

そして、ポリスの第二の課題はアキレウスとホメロスの関係を組織化することにある。これは「ポリス成立以前に経験された活動のリスクに結び付けられており、活動と語りに固有の空虚さに対する救済策をもたらすことから成っていた」 (*ibid.*)。いかなる偉業もそれを想起する者なしには他の出来事に埋没し消え去る宿命にある。ポリスは偉大な言葉と行いを、市民達が見聞し、後世に語り伝えるという機能を有した「一種の組織化された追憶・記念碑 (*ein organisiertes Andenken*)」 (VA: 248) である。従って、アレントが指摘するように、戦没者の国葬においてベリクレスは次のように宣言することになる。「かくも偉大な証績をもってわが国力を衆目に明らかにしたわれらは、今日の世界のみならず、遠き末世にいたるまで世人の賞賛のまとなるだろう。われらを称えるホメーロスは現れずともよい」 (VA: 462, Anm. 27 zur s. 248) 等。かくして、ポリスはそれ

前のアキレウスとホメロス―活動者と工作人、芸術家の協働関係を退け、「活動を制作的で詩的な芸術への依存から解放することになる」(VA:248)。ここにギリシア人による公的領域と私的領域、すなわち活動とそれ以外の活動力である制作、労働の峻別の一つの要因を見出すことも可能であろう¹¹⁾。かくして、ギリシア人はポリスの創設によつて他の憂慮に煩わされることなく、自ら「暴露の営みに専念することが可能となった。しかし、この活動の純粹化の試みによつて「共同的に暴露する継続性」はますます彼らの関心から退き、個人主義が強化されていくことになる。

活動の純粹化の試みは「ギリシアの意味において政治的領域はある種の永続的な劇場に類似している」(VA:249)と指摘されるように、演劇芸術としての活動を成立させた。その都度のパフォーマンスに偉大さが現実化するという点で、活動は制作のように絶えざる目的の手段化のうちに費消されることがない。そして、斯かる活動理解は、「政治についてのすべての後代の概念と異なり、法制定者の行為を本来的な政治的行為に数え入れない」(VA:244)という態度をもたらした。なぜなら、「ギリシア人達にとって法制定者は都市の建造者と同じであり」、「法律は彼らにとつて活動の所産ではなく、都市を取り囲みその物理的同定性を画定する城壁のごとき、制作の産物であった」(ibid.)からである。従つて、「法制定者の仕事は断固として、本来的な政治的生がそれに固有の行為と共に始まることができるようになる前に完了されていなければならなかった」(ibid.)

のであり、立法行為は演劇に先行する劇場の建設のごときものとして了解されていた。斯かる意識は「都市建造者のごとき法制定者は市民によつて外国から招聘されることもあったのであり、都市の市民である必要はなかった」(ibid.)という点にも現れている。法律は我々の行為の規範ともなり、それゆえ我々の「共通感覚、常識 (common sense)」にとつて不可欠の要素である。従つて、ギリシア人の法律への無頓着な態度は、自らが由来し、自らを構成し、自らの関心を傾けるべき自己の基盤への驚くべき無関心を告げている。ポリスによつて人々は自らの卓越性を示すことに専念することが可能となったが、そのために活動の根底にある相互応答関係は閑却され、相手を打ち負かすための語りの技巧が主要な関心となったのである。

言うまでもなく、「闘技精神」には他者との融和よりも相手への対抗意識が深く刻印されている。しかし、これは一概に否定されるべきではないだろう。なぜなら、これは人々の関係を動的にし、自らの立脚する共同性を絶対視して同一性に自閉することを防ぐ役割を果たすからである。何より通常の規範を断ち切つて更新の可能性を開くという点で、闘技精神は「始まり」へと臨み新しい秩序を創設するために不可欠の要素といえるだろう。それは、「都市国家は徹頭徹尾：非日常的なものが日常生活の首尾一貫性と経過に影響を及ぼすことに狙いを定めていた」(VA:247)と指摘される通りである。しかし、これは、「今日でも信じがたいアテナイにおける才能と天才的天分の蓄積の一つの理由であると同時に、ギリシアの都市国家の驚くべき短

命の一つの理由」(ibid.)でもある。法律に対する態度に見られるように、ギリシア人達は自己暴露に固執し、更新の意識が稀薄であった。従って、その活動は畢竟、個人芸へと収斂せざるえず、自浄作用の欠如ゆえに市民間には腐敗が瀰漫することになる。人々が互いに「自らの特異な差異性において誰であったかを開陳する」ためには、共同性が不可欠であり、絶えざる他者承認が要請される。アレントが「複数性」概念において個人の特異性と他者との共生の相互共属性を強調するのはこのためである。政治が闘技に限定され、自らの活動了解が由来し、活動を規制すると同時に活動によって更新されるべき過去からの継続性への無関心にギリシア的活動の限界点がある。その帰結はプルタルコスが伝える次の逸話に垣間見えるであろう。

「ある男があるときデモステネスに近づいて、自分がひどい暴力をふるわれたことを話した。へしかし、あなたは」とデモステネスは言った、へあなたが私に話してくれたことなど何一つ彼らなかったのだ。それを聞いて男は、声をあげて叫んだ、へ何一つ彼らなかったって？。へ今やっ」とデモステネスは言った、へ攻撃されて被害を受けた本人の声が私に聞こえてきた」(HC, 26, note 8: 傍点引用者)。

これは第四節で「活動と言論の関係をより低い次元で明らかにする」(ibid.)事例として引用されている。デモステネスは男の訴えを一度は退ける。そして男が「声を上げて叫ぶ」という

赤裸々な感情表現に訴えた時にはじめてその声は聞き届けられる。「ひどい暴力」に対して「激しい」感情表現で応じることが、あるいは活動と言論の等根源性と同等性をわずかなりとも指し示しているかもしれない。だが、それは先述の「正しい瞬間に正しい言葉を見つけ出すことが…すでに活動である」(VA, 29)という規定にふさわしい在り方と言えるだろうか。

我々が正しい瞬間と正しい言葉を掴み取るためには共通感覚に訴えねばならない。だが、訴えるべき共通感覚をなおざりにしたギリシア人達が頼るべきものは、もはや他者の「同情」を喚起するパフォーマンスしかないのである。かくして、至芸を競う演劇芸術としての活動は、単なるお涙頂戴劇にまで転落した。もちろん、これは政治の場において自らの私的な窮状を訴えることを否定するものではない。それには現今の体制の見直しを促すといった意味がある。ただし、「攻撃されて被害を受けた本人の声」という当事者、さらに拡張すれば利害団体の立場から発言する限り、それは中立的な視点と自由な議論の入る余地をなくしてしまうであろう。「私はこんなにひどい目にあっている。だからあなたは私の訴えを聞き届けなければならぬ」。あるいは「私は被害を受けていない。だから私があなたの訴えに応じるいわれはない」。どちらも相手に応答せず黙殺するという意味で無言の暴力の行使である。この点で、アレントが公私両領域を区別するのは当然のことであろう。私人の立場を離脱してはじめて中立的な問題設定が可能になるからである。以上のように、ギリシア的活動はその純粋化への志向ゆえ

に中立性を喪失し、自らの基盤を批判的に検討し更新する構えを欠いていた。そしてこれはギリシア的活動を規定している「闘技精神」からの帰結と言わざるをえないのである。

結論に代えて

アレントにとつて、ギリシア的活動は自己暴露を第一目的としていたがゆえに、「始まり」を創設するための条件たりえなかった。ただし、相互応答による自己の特異性の暴露とそれに伴う日常への非日常的なものの挿入を目した闘技精神は人間の創造性を担保するものたりえるのであり、その限りにおいて闘技精神を成り立たしめる相互応答関係は「複数性」を構成する契機として取り入れられ、また市民に活動の自由を開いた点でポリスは評価されるのである。しかし、この創造性が始まりの創設へと向けられるには、複数性において経験される活動のアポリアー過去の不可逆性と未来の予測不可能性が明確に自覚されねばならない。ギリシア的活動は個人主義にとどまっていたがゆえに、予測不可能性の問題は顕在化しなかった。また、先に述べた不可逆性と予測不可能性の相即性を敷衍すれば（本稿第一節参照）、ギリシア人は過去の不可逆性の問題に対しても自覚的ではなかったと言える。実際、立法行為を活動と区別した点に、過去からの継続性に対するギリシア人の軽視が見て取れる。そして、活動のアポリアーによって生の一回性が自覚されるということを鑑みれば、ギリシア人の歴史循環説は彼らの

活動了解にも刻印されているとも言え、だからこそ彼らは始まりの創設ではなく、「不死の名声」を勝ち取ってオリュンポスの神々の不死性にあやかるところを活動の意味内容としたのであった²⁸²。斯かる英雄の偉業はポリスの創設によって市民に開かれたが、その根本にある闘技精神によって破綻せざるをえなかった。そこで我々は「我々の知る限り最も政治的な民族であるローマ民族」(VA: 17)の政治的経験に目を向ける必要がある。それは端的に「人々にとつて生は人々の間に存在する (inter homines esse) と呼ばれ、死は人々の間に存在することやめる (desinere inter homines esse) と呼ばれる」(ibid.) と言われ、アレントによれば「彼らはギリシア人とは異なつて『時間の継続性 (das Kontinuum der Zeit)』を明確に意識していた (VA: 248)。はたしてローマ人の政治は始まりの条件たりえるのだろうか。アレントの活動論を構成するこのもう一つの契機に関しては稿を改めて論じることしよう。

※本稿においてアレントの文献は以下の略号で示される。

LA: *Der Liebesbegriff bei Augustin: Versuch einer philosophischen Interpretation*, Herausgegeben und mit einem Vorwort von Lütkehaus, L., Philo, 2003. (千葉真訳『アウグスティヌスの愛の概念』みすず書房、二〇〇二年)。

EUTH: *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft: Antisemitismus, Imperialismus, Totalitarismus*, Ppeter, 1986. (大久保和郎・太島がおり訳『全体主義の起源 (二)』みすず書房、新装版、

一九八一年)。

HC: *The Human Condition*, Intro. by Canovan, M., The University of Chicago Press, 1998. (志水速雄訳『人間の条件』ちくま学芸文庫、筑摩書房、一九九四年)。

BPF: *Between Past and Future*, Penguin Books, 1993. (齋藤純一・引田隆也訳『過去と未来の間』みすず書房、一九九四年)。
VA: *Vita activa oder tätigen Leben*, Piper, 2002. (HCの独語改訂版)。

(1) 注

斯かる政治理解は、アレントがすべての行為の条件として提示する「出生性 (Natalität)」に関わっている。人間の「誕生 (Geburt)」は過去、現在、未来の誰とも異なった者として世界に到来することであるがゆえに、それは新たな関係性の「始まり」である。そして、人間が自らの生の意味を問う――「私は何のために生まれてきたのか」――、始まりを企投することとそれに応えようとするならば、必ずや自らの始まりへとまなざしを向けることになる。しかし、そこで人は自らの存在根拠との断絶に直面せざるを得ない。従って、行為しつつ事物も含むあらゆる他者と関わることによって、その都度自らの存在を証しなければならぬのである。斯かる構造の原型はアレントの学位論文『アウグスティヌスの愛の概念』(一九二九年)に見出される。「神愛 (caritas)」は救済という絶対的未来へと向かうと同

(2)

時に、創造者による人間の創造という絶対的過去への還帰を意味する。つまり現世では体験不可能な絶対者のもとでの至福を欲求可能なのは、絶対者による創造によって保証されているからである。従って、神愛は自らの前方へと自らの以前へという「前の二重性 (Doppeltheit des ante)」を有し、「還帰するもの」として「そこから (Von-wos-her)」であり、同時に「そこへ (Wohin)」とある (LA: 64―強調原文)。そして、『活動的生』において始まりへの存在と始まりの存在は相即的に把握されており、この至福の生の欲求は言わば「始まりの二重性」として変奏されている。すなわち、未だ知られない新しい始まりの創設は、誕生という新しい始まりと相即している。

(3)

『活動的生』では「結果の予測不可能性」、「一度始められた過程は再びやり直せないこと」、「起こったことの責任を一人の個人に問うことの不可能性」(VA: 279)である。斯かる三つの「ない」という活動論的有限性は存在論的有限性にその根を張っている。つまり、人間にとって自らの誕生の根源的由来は了解不可能であり、無性に直面せざるを得ないことである(本稿注一参照)。

(4)

『活動的生』第三三節「行われたことの取り返しのかなさ」と救しの力」並びに第三四節「行為の予測不可能性と約束の力」を参照。この両節の含意に関しては、拙稿「活動の時間性―H・アレント『人間の条件』第三三、三四節読解」(『倫理学』第二三号、筑波大学倫理学研究会、二〇〇

七年。)を参照。

ホメロス『イリアス』第九歌四四三。訳出はアレントの英訳による。その際、松平千秋訳『イリアス(上)』(岩波書店、一九九二年)を参照した。

ソポクレス『アンティゴネ』一三五〇。訳出はアレントの英訳による。

「人格の本質 (Wesen) — 人間一般の本性 (Natur) ではなく『本性は我々にはどのみちない』、そして個人の長所と短所の総計でもなく、ある人が誰であるか (wer) という本質である」が、一般的にはじめて生じ、持続し始めることができるのは、生が衰弱し物語以外何も残さない時である」

(VA: 242 — 「」内原文)

アレントは「いかに深くこの〈個人主義〉がギリシアの本質に横たわっていたと言わざるをえないか」を「各人 (jeder, hekastos)」というギリシア語が「引き離された (abgesondert)」 「・・・から離れた (von hern)」を意味する hekastos によって由来するところから引証している (HC: 194, note 20, VA: 462, Anm. 20 zur s. 243 — 傍点引用者)。

「人格の同定性をなすこの持続的情態性は、可視的であるにもかかわらず、活動と言論における特殊な不可触性において暴露される。一方でそれは可触的な仕方、いわば取り扱い可能な仕方で人生物語において際立つ」 (VA: 242)。トゥキユディデス、II, 41 (久保正彰訳『戦史(上)』岩波文庫、岩波書店、一九六六年、二二九頁 — 傍点引用者)。

(11)

アレントの公私両領域の区別は古代ギリシアのそれと同一のものではない。ポリスにおいて、活動の領域は労働と制作の領域と没交渉的な排他的領域であった。しかし、アレントにとって、これら三つの活動力は矛盾対立しつつも相互依存関係にある三幅対として把握されている。これらの関係は時代の変遷に従って様々に変奏されていくのであって、その系譜学的叙述が目されているのがアレントの『活動的生』なのである。アレントが政治的なものの根源を探索し、ギリシア人の経験を手がかりに諸活動力の圏域を確定しようと試みるのは、ギリシア的活動の再興のためではなく、斯かる関係性を阐明するためである。従って、アレントにとって問題となるのは、諸活動の圏域が曖昧になり、それらの三幅対の関係が忘却されることである。この点に関しては前掲の拙稿を参照。

(12)

アレントは『全体主義の起源』をアウグスティヌスの「始まりが存在せんがために人間は創造された」という言葉で締めくくっている (EUTH: 979) が、これがアレントの誕生の思想のモチーフとなる(本稿注一参照)。ここでのアウグスティヌスの主張は循環説に対抗するためのものであり、生の一回性と「以前にはなかった新しいもの」の生起が問われている(服部英次郎訳『神の国』(三)、岩波文庫、一九八三年、XII・21)。

(いずも・しゅんめい 筑波大学大学院)